呼吸器腫瘍内科

（スタッフ）

部長　　：森永　亮太郎
主任医師　：久松　靖史
嘱託医　　：駄阿　徳太郎

2014 年の診療科新設以来、患者数増加に伴って徐々にスタッフも増員となっています。2017 年３月より久松靖史が、2020 年７月より駄阿徳太郎が加わって、現在は３人体制で診療しています。

（診療実績）

2021 年の入院患者数は 383 名でした。ここ数年は毎年 50 名ほど増加しておりましたが、2021 年は前年との比較でほぼ横ばいでした。内訳を疾患別にみると、肺がんがその３/４を占めており、肺炎（がん治療中に併発）、胸腺 / 胸膜悪性腫瘍、原発不明がん、その他のがん腫が続くかたちとなっています（図）。

外来患者数は延べ 3,928 名で、2020 年と比較して約 500 名増加しています（表）。その背景として、がん薬物療法における治療の場が入院から外来へと移行していることが挙げられますが、コロナ禍がもたらした一般病床の入院制限や面会制限がこの動きをさらに加速させていると思われます。現在、当科の化学療法件数の７－８割が外来での治療となっています。

呼吸器腫瘍内科では、手術による根治治療が難しい進行肺がんの患者を主な対象として薬物療法による治療を中心に診療を行っていますが、進行期のがん患者は痛みをはじめとしたさまざまな苦痛を抱えておられます。当科の医師のうち２名は「緩和ケアセンター」のスタッフを兼任しておりますので、患者の抱える苦痛を極力軽減し、より有意義な時間を過ごしていただけるように、同センターのスタッフと協働しながら緩和ケア診療をがん治療と並行して提供できるように努めています。また、年に一回開催している緩和ケア研修会では、当科スタッフもファシリテーターとして参加しており、若手医師（特に研修医）を中心とした医療従事者に緩和ケアへの理解を深め、さらには実践していただけるよう励んでいます。

他のがん腫と同様に肺がん領域におきましても免疫療法をはじめとした多くの新薬が臨床現場に導入されており、「診療ガイドライン」の改訂も頻繁に行われています。そのような状況のなかで、一人一人の患者に現時点での最適な治療を届けることができるように心がけています。

（今後の方向性）

肺がんに対する薬物療法の成績は、新薬の臨床導入により徐々に改善されつつありますが、未だ満足できるレベルには至っておりません。私どもは西日本がん研究機構（WJOG）や九州肺癌機構（LOGiK）といった臨床試験グループの一員として臨床研究に携わっています。微力ではありますが、将来の新しい治療法の構築に尽力していきたいと考えています。

分子標的治療、免疫療法とがん診療を取り巻く環境はめまぐるしく進歩してきておりますが、当院は 2021 年に「がんゲノム医療連携病院」に指定されました。新しいがん治療に施設全体で取り組んでいくなか、私どもも他診療科・スタッフと力を合わせて、よりよいがん医療を提供できるよう尽力していきたいと考えています。

（文責：森永亮太郎）

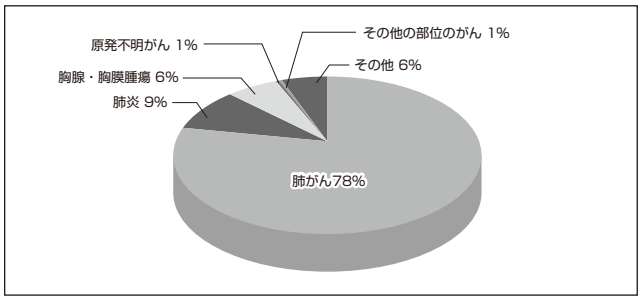

図　2021 年　呼吸器腫瘍内科入院患者内訳

表　呼吸器腫瘍内科　診療実績（2019-2021 年）

年	2019年	2020年	2021年
入院患者数（人 / 年）	334	381	383
平均在院日数（日）	12.6	12.6	10.8
外来患者数（延べ数、人 / 年）	2,649	3,434	3,928